

# 寺床遺跡

発掘調査の概要—A地区—

1982年3月

島根県 東出雲町教育委員会

## 序

「寺床遺跡」の発掘調査は、昭和55年度から実施し当地方ではまれにみる4世紀ごろの構築と推測される前期古墳をはじめ、弥生時代の集落跡など数多くの遺構を確認しました。とりわけ、1号墳については、学術上きわめて貴重な遺跡と判断され、古代出雲における古墳構築過程の問題解明にあたって一条の光をなげかけたものとして多方面から注目されております。

本年度は、前年度に引き続き本遺跡の丘陵部分の発掘調査を行ない、数ヶ所の遺構及び各種の遺物を検出しました。

本書は、昭和56年度の発掘調査の概要をまとめたものであります。十分な記録とはいえませんが、埋蔵文化財研究の資料として多くの方々に活用していただければ幸いに存じます。

なお、この調査にあたってご指導・ご協力いただきました島根県教育委員会、地権者をはじめ関係各位に対し、衷心より厚くお礼申し上げます。

昭和57年3月

島根県八束郡東出雲町教育委員会

教育長 宮廻 勝重

## 例　　言

1. 本書は、東出雲町教育委員会が国庫と県費の補助を受けて、昭和56年度に実施した寺床遺跡A地区の調査概要である。
2. 遺跡は、島根県八束郡東出雲町大字揖屋字寺床に所在し、次のような調査組織・構成で行なった。

**事務局** 宮廻勝重(教育長)、井上治(教育次長補佐)、古藤勇(主事)

**調査員** 竹中哲(埋蔵調査員)

**調査補助員** 神田郁子(駒沢大学学生)、加藤直宏(東海大学学生)、曾田稔(島根大学学生)

**調査協力者** 柳浦俊一(風土記の丘資料館職員)、三宅博士(同)、内田律雄(県文化課主事)、原田律夫、石倉一郎

**調査指導者** 河原純之(文化庁記念物課文化財主任調査官)、山本清(島根大学名誉教授)、渡辺貞幸(島根大学助教授)、田中義昭(同)、池田満雄(松江農林高校教諭)、東森市良(横田高校教諭)、蓮岡法暉(木次中学校教諭)、門脇俊彦(津田小学校教諭)、勝部昭(県文化課文化財保護主事)、片寄義春(同)、松本岩雄(県文化課主事)

なお、調査及び整理にあたっては次の方々から御指導を賜った。(敬称略、順不同)

大塚初重(明治大学教授)、直木孝次郎(岡山大学教授)、甲元真之(熊本大学助教授)、川西宏幸(平安博物館助教授)、杉原和雄(京都府記念物課技師)、前島己基(奈良国立博物館技官)、春成秀爾(国立歴史民俗博物館助教授)、本村豪章(東京国立博物館主任研究官)

3. 遺物整理にあたっては発掘担当者、調査補助員以外に次のものが参加して行なった。

荒木利幸(早稲田大学学生)、岩田美江子(中央大学学生)

4. 描載図面は、松本岩雄、片寄義春、柳浦俊一、内田律雄、原田律夫、神田郁子、加藤直宏、荒木利幸、岩田美江子、曾田稔、宮内美貴子、森山紀美子、小原明美、竹中哲の作図・製図にかかり、写真は、松本、勝部、井上治夫、竹中の撮影になるものである。

5. 本書で使用した写真的うち航空写真は(株)ワールド航空事業の提供を受けた。

6. 遺構は溝状遺構S D、土壙 S K の略号を遺構番号の前に付した。

7. 本書に用いた方位は、全て磁北を示す。

8. 本書の執筆は竹中があたり、編集は、勝部、柳浦の協力を得て松本、竹中が行なった。

## 目 次

I 調査の経過.....	1
II 位置と環境.....	2
III 遺跡の概要.....	3
1. 2号墳.....	6
2. 3号墳.....	10
3. 4号墳.....	13
4. A-8地点.....	18
5. A-5地点.....	20
IV まとめ.....	22

## 挿図目次

第1図 遺跡の調査区配置図.....	1
第2図 遺跡の位置図.....	2
第3図 A地区調査前地形測量図.....	4
第4図 A地区調査後地形測量図.....	5
第5図 2号墳墳丘実測図.....	6
第6図 2号墳主体部実測図.....	7
第7図 2号墳出土遺物実測図.....	9
第8図 3号墳墳丘実測図.....	10
第9図 3・4号墳墳丘上層図.....	10・11
第10図 3号墳主体部実測図.....	12
第11図 3号墳出土土器実測図.....	13
第12図 4号墳墳丘実測図.....	14
第13図 4号墳溝内土器出土状況.....	15
第14図 4号墳主体部実測図.....	16
第15図 4号墳出土土器実測図.....	17
第16図 A-8地点遺構配置図.....	18
第17図 A-5地点遺構配置図.....	20
第18図 A-5地点 S D 07出土土器実測図.....	22

## 図版目次

- |                     |                           |
|---------------------|---------------------------|
| 図版 1-1 遺跡遠景         | 図版 9-2 3号墳第1主体部遺物出土状況     |
| 図版 1-2 A地区調査前の状況    | 図版 9-3 3号墳切削溝土層           |
| 図版 2-1 A地区調査前の状況    | 図版 9-4 3号墳第1主体部出土土器       |
| 図版 2-2 A地区調査前の状況    | 図版10-1 4号墳調査後の状況          |
| 図版 3-1 A地区調査前の状況    | 図版10-2 4号墳調査後の状況          |
| 図版 3-2 A地区調査後の状況    | 図版11-1 4号墳主体部遺物出土状況       |
| 図版 3-3 1号墳頂部の埋葬施設   | 図版11-2 4号墳主体部             |
| 図版 4-1 A地区調査後の状況    | 図版11-3 4号墳切削溝上層           |
| 図版 4-2 A地区調査後の状況    | 図版12-1 4号墳溝内遺物出土状況        |
| 図版 5-1 2号墳調査後の全景    | 図版12-2 4号墳溝内遺物出土状況        |
| 図版 5-2 2号墳主体部上層     | 図版13 4号墳出土上師器・須恵器         |
| 図版 5-3 2号墳主体部       | 図版14-1 A-8地点調査後の状況        |
| 図版 6-1 2号墳溝内遺物出土状況  | 図版14-2 A-8地点調査風景          |
| 図版 6-2 2号墳切削溝       | 図版15-1 A-8地点 S K01土層      |
| 図版 6-3 2号墳切削溝上層     | 図版15-2 A-8地点 S K01        |
| 図版 7-1 2号墳他出土の須恵器器台 | 図版15-3 A-8地点 S K03・04土層   |
| 図版 7-2 2号墳溝内出土の円筒埴輪 | 図版15-4 A-8地点 S K03・04     |
| 図版 7-3 円筒埴輪細部       | 図版16-1 A-5地点調査後の状況        |
| 図版 8-1 3号墳調査後の状況    | 図版16-2 A-5地点 S D07内遺物出土状況 |
| 図版 8-2 3号墳調査後の状況    | 図版16-3 A-5S D07出土土器       |
| 図版 9-1 3号墳第1・2主体部   |                           |

## I 調査の経過

昭和48年、東出雲町出雲郷地区の水田が宝満山鉱山から流出した鉱毒によって汚染されていることが、大きな社会問題となった。そこで当町では、国・県の補助のもとに汚染田に客土する公害防除事業を実施することになり、この事業に伴う土砂の採土地に寺床丘陵が選定されるに至った。ところがこの寺床丘陵には埋蔵文化財の存在が予想されたため、東出雲町教育委員会は、昭和55年度に事前の発掘調査を行なった。

調査の結果、丘陵中央に位置する1号墳（A地区）が当地方における古墳発生の問題を解明する上できわめて重要な意味をもつ前期古墳であることがわかったのをはじめ、丘陵東側斜面（D地区）においては県下ではじめての弥生時代前期の住居跡が検出された。そ

うしたことからこの遺跡の重要性を認識した東出雲町教育委員会は関係諸機関と協議のうえ、遺跡全体の構成と性格を究明する目的であらためて昭和56年度に国・県の補助を得て発掘調査を実施することになった。

今回の調査は、1号墳の北西に派生する丘陵部（A地区）を対象とし、南側から北側に向かって順次発掘調査を実施した。調査は昭和56年4月20日から開始され、7月31日に現地調査を終了した。



第1図 遺跡の調査区配置図 1:2000  
(■ 本審査範囲)

## II 位置と環境

寺床遺跡は、島根県八束郡東出雲町大字揖屋字寺床に所在する。ここはちょうど、揖屋の中心部から西方約1kmほどのところにあたり、県東部主要平野である意宇川下流平野の東端に位置している。この丘陵には、昭和55年度に調査された寺床1号墳を含む縄文時代から弥生・古墳・奈良時代までの各種の遺構・遺物が確認されている。1号墳が築かれている丘陵最高所は標高25mあまりで、丘陵上からは眼下に中海を介して島根半島の山並みが展開し、眺望のきく位置を占めている。

本遺跡の西方にひらける意宇川下流平野周辺は、出雲地方の中でもかなりの遺跡密集地として知られている。平野の南側に出雲国府跡、北側丘陵麓には出雲国分僧寺・尼寺跡があり古代出雲の政治・文化の中心となっていた。また、本遺跡のごく近辺には舶載の内行花文鏡を出土した古城山古墳、5基の埋葬施設をもつ大木権現山1号墳などの前期の中小



1. 寺床遺跡 2. 古城山古墳 3. 大木権現山古墳群 4. 姫津古墳群 5. 渋山池古墳群 6. 安垣古墳群  
7. 粟坪古墳 8. 的場遺跡 9. 出雲国府跡 10. 出雲国分寺跡 11. 出雲国分尼寺跡

第2図 遺跡の位置図 1:50000

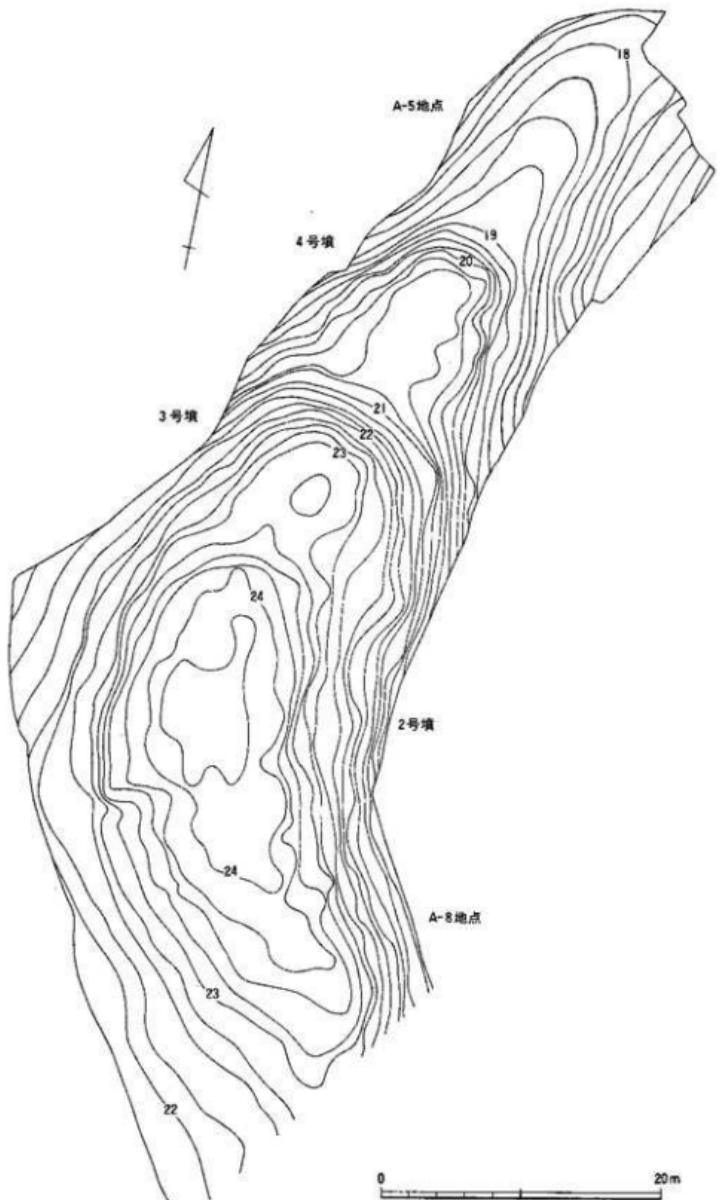
規模墳が知られ、石棺式石室を内蔵する栗坪1号墳、さらに浜山池古墳群、安垣古墳群、姫津古墳群などがある。

### III 遺跡の概要

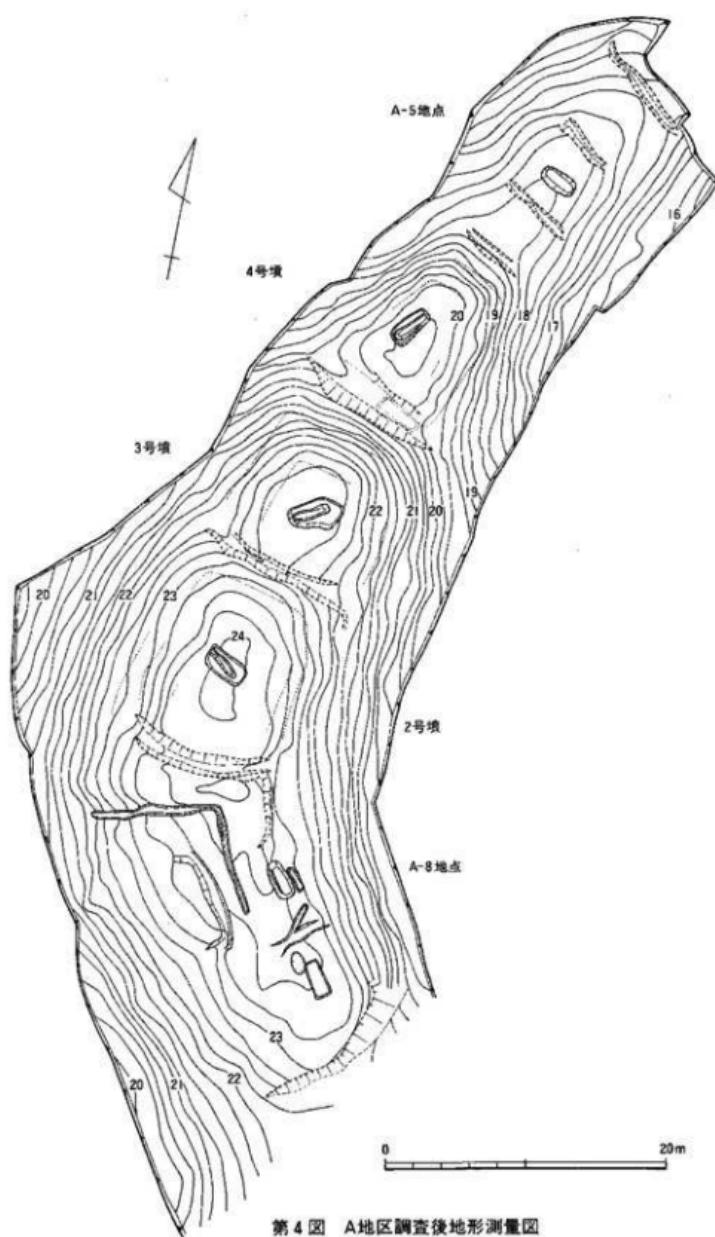
寺床遺跡は、発掘にあたって便宜上丘陵頂部に位置する1号墳から北西に派生する尾根筋をA地区、1号墳の北東に連なる丘陵をB地区、南側にあたる丘陵をC地区、丘陵東側緩斜面をD地区、北側緩斜面をE地区として年次を変えて調査を行なった。

昭和55年度調査は、A地区1号墳、B・C・D地区を対象として発掘調査を行なった。1号墳は調査途中であるが、本遺跡中最大規模の古墳でその様相は弥生時代墳墓の特徴と典型的な前期古墳の特徴をかねそなえたものということができる。弥生時代墳墓的な要素としては、ほとんど盛土をもたず、丘陵を切削加工することによって東西27.5m、南北22.3m、高さ北辺で4mあまりの方形台状の墓域をつくり出し、外部施設として弁石、埴輪等がみられないことである。さらに、墳形は前方後円墳とか整美な方墳ではなく不定形な長方形をなし、墳頂部に4個、墳裾部に2個という多数の埋葬施設を設けていることなども弥生時代墓制の伝統を残している要素の1つといえる。典型的な前期古墳の特色は、墳丘規模や中心主体（第1主体）の構造、副葬品の特徴にみることができる。すなわち、1号墳は特に北側から見た場合一辺30m、高さ4m以上にも達する墳丘をつくり出しておらず、出雲地方においてはかなり巨大な墳丘をもっているといえる。また、墳丘中央部に位置する第1主体は長さ6.3m、幅4m、深さ1.2mあまりの大規模な墓壙を穿って墓壙内に挙大の壁を敷き長さ4.6mにもおよぶ長大な割竹形木棺を納め、その上部を砂でカバーするといった入念な内部構造である。さらにこの墓壙には典型的な前期古墳がもつ大きな特徴の1つである排水施設が設けられていた。副葬品も船載の斜縫二神二獣鏡（径約13cm）をはじめ硬玉製勾玉、鉄製剣、鉄製大刀など前期古墳の特徴を十分そなえたものであった。B地区では時期、性格不明の土壙2基と溝状遺構1条を検出し、C地区では奈良時代ごろの溝状遺構1条を検出した。D地区では竪穴住居跡3、溝状遺構10、土壙5などが確認された。このうち竪穴住居跡は県下でははじめての弥生時代前期末と考えられるものであった。他の竪穴住居跡や溝状遺構は弥生時代中期末を主体とするものであったが、ほかに縄文土器、弥生土器、打製石臼、石謎、砥石、黒曜石片など多數の遺物も出土している。

今年度調査は、1号墳から北西に派生する丘陵部（A地区）を対象として調査を行なった。A地区とした丘陵は、南東から北西に直線上にのび、2号墳の位置する付近から丘陵軸線がほぼ北に屈折している。遺構としては方墳3基、土壙5基、溝状遺構7条などが検



第3図 A地区調査前地形測量図



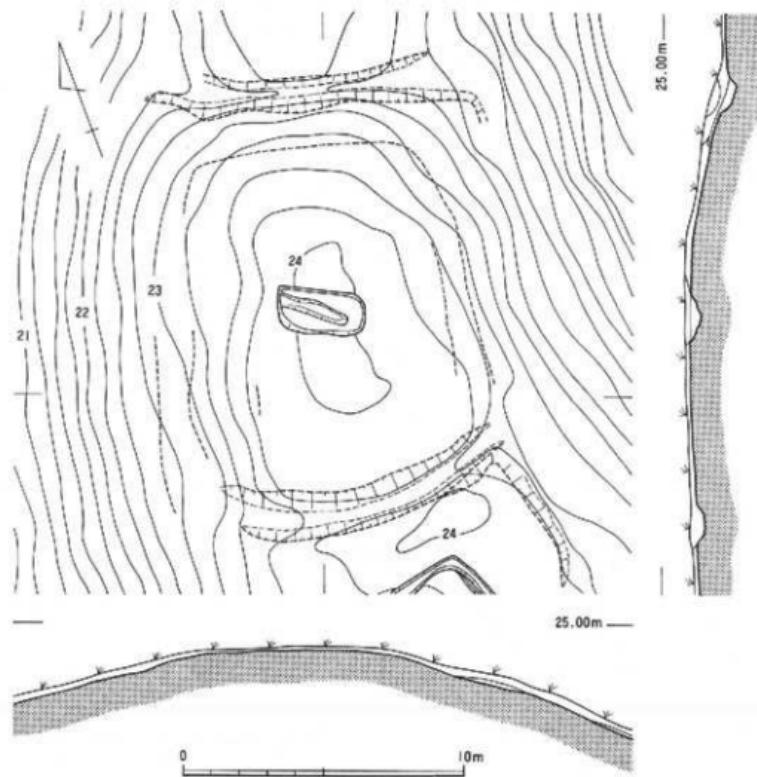
第4図 A地区調査後地形測量図

出された。丘陵全体をながめると、狭い丘陵尾根上にそれぞれの墳丘裾を接するようにして小規模な方墳が築かれ、平坦地には土壙、溝状遺構などが掘り込まれている（第3・4図）。

以下その概略を記すことにする。

### 1. 2号墳

**墳丘** 本墳は、1号墳から北西に派生した丘陵が北に主軸を転換する標高24mあまりのところに位置している。1号墳から2号墳にかけてはほぼ平坦な丘陵が続き、そこから3・4号墳にかけてはかなり急斜面となるが、2号墳はちょうどその傾斜変換点あたりに築かれている。発掘前の現状では墳頂部が削平されており、地形測量によって墳形を確認することができなかった（第3図）。



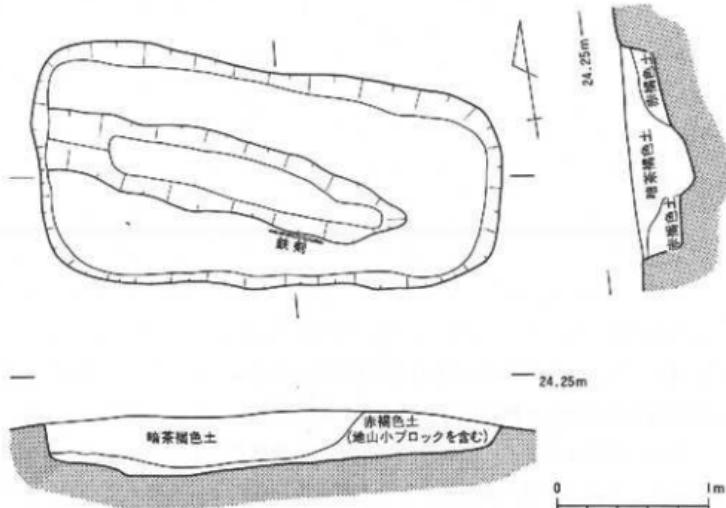
第5図 2号墳墳丘実測図

調査の結果、南側で尾根筋に直交して東西方向に穿たれた溝状遺構が検出され、北・東・西側では地山を整形した痕跡が認められた。溝状遺構はわずかに弧状を呈していたが、北・東・西側の地山整形は直線的になされていることから一応方形を意識して築かれたものと判断された。なお、墳丘西側裾部には幅約1.3mの平坦面が長さ6.5mにわたってみられた（第5図）。

墳丘規模は南北13.7m、東西10mで、高さは北側裾からは約1.45m、南側の溝底から約1.2mを測る。墳頂部には東西幅約7mの平坦面が長さ10mにわたって観察された。墳頂部では表土直下で遺構を検出したが、墳丘東西方向の土層をみると、表土、流土、地山となっておりもとは若干の盛土があったものと考えられた。

溝の規模は長さ10m、上端幅1.5m、下端幅0.45m、深さ0.3mで断面は「U」形を呈している。溝内からは円筒埴輪片、須恵器器台片が出土した。円筒埴輪片はいずれも破片の状態で溝底からかなり浮いた位置で出土しており、原位置を保つものは認められなかった。ただし、それらは大まかにいって2ヶ所に比較的まとまった状態で散布しており、うち1個体はほぼ完形に復元し得るものであった。須恵器器台片も同筒埴輪片とはほぼ同じようなレベルから出土したものである。

**埋葬施設** 直接地山に土壤を穿ちそのなかに木棺を直葬する土塙墓である（第6図）。土壤は墳丘のほぼ中央に長軸をN-82°Wに向けて1基穿たれていた。土壤の平面形は整然と



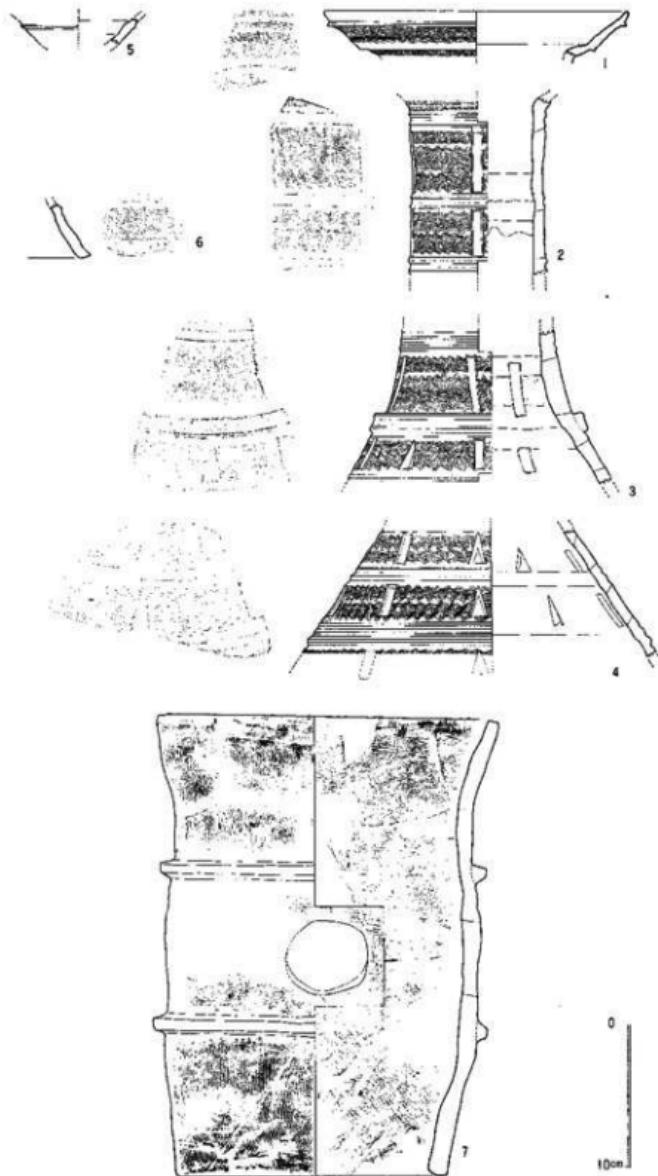
第6図 2号墳主体部実側図

したものではないが、大略隅丸長方形を呈している。検出した規模は長さ3.1m、北西幅1.5m、南東幅1.3m、深さ0.36mの素掘りのもので、墓壙底は浅く「U」字形にくぼめられていた。墓壙底の「U」字形にくぼんだ規模は長さ2.3m、幅0.5m、深さ0.2mである。この墓壙の形状などから考えると通常の箱形の木棺を直葬したとは考え難い。また墓壙西侧小口の方がわずかに幅広くつくられ、床の高さも東側より高いことなどから西側に頭部を置いていたものと推定される。

副葬品は、墓壙内部から鉄剣1口が出土した。剣先を西に向けた状態でほぼ水平に置かれていた。全長40cmあまりのものである。

**遺物** 鉄剣のほかに、溝内から円筒埴輪片と須恵器器台片が出土している。このうち須恵器器台片については1号墳から3号墳にかけて広い範囲にわたって出土しているためどの遺構に伴うのか不明であるが、溝内出土の円筒埴輪片と同一位置・レベルで、かつこの溝内から一番多く出土しているので、一応本墳でとりあげることにした（第7図）。

第7図1～4・6は筒形器台である。このうち3、4、6は2号墳の溝、1は3号墳の東側斜面から出土したものである。また2は1号墳東側斜面とA-8地点南側斜面から出土したものを受け合したものである。1は復元口径21.4cmの受部片で逆「ハ」の字状にわずかに内湾しながら開く。口唇部は丸い。外面は2本の凸線で区画され、櫛による緻密でていねいな波状文が入っている。2は筒部片で、上端はわずかに外反しており、受部へと変化する部分にあたると思われる。筒部外面は2本単位の鋭い凸線を3段に配して文様帶を区画している。各文様帶には波状文が廻り、四方に長方形の透しがある。3は「ハ」の字形に広がる筒部から脚部にかけての部分で下端復元径18.6cmである。上下に凸線、中程に貼り付け凸帶を配して文様帶を区画している。各文様帶には波状文が廻る。上部文様帶には長方形の透し、下部文様帶には長方形の透しと三角形の透しを交互に配している。4も下端復元径24.8cmの筒部から脚部にかけての部分で、凸線で文様帶を区画する。各文様帶には櫛による波状文が廻り、長方形と三角形の透しを交互に配している。6は小片のため器種は不明確であるが、筒形器台の脚部と考えられる。端部は平坦で上端には凸線、その下には櫛による波状文が廻っている。これらはいずれも外面はていねいに調整されているが、内面の調整は粗く、2、3は粘土紐の接合痕の残る部分がある。基本的には回転ナデで調整されるが、3の内部には回転を使わないナデ調整や指で押圧したままの痕跡がある。胎土は大きな砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面暗灰色、内面及び断面は淡青灰色ないし赤褐色を呈している。5は2号墳の溝から出土した器種不明の須恵器片である。器壁が薄く、復元口径も上端で10cmと小形である。7は溝から出土した円筒埴輪である。高さ32.5cmで

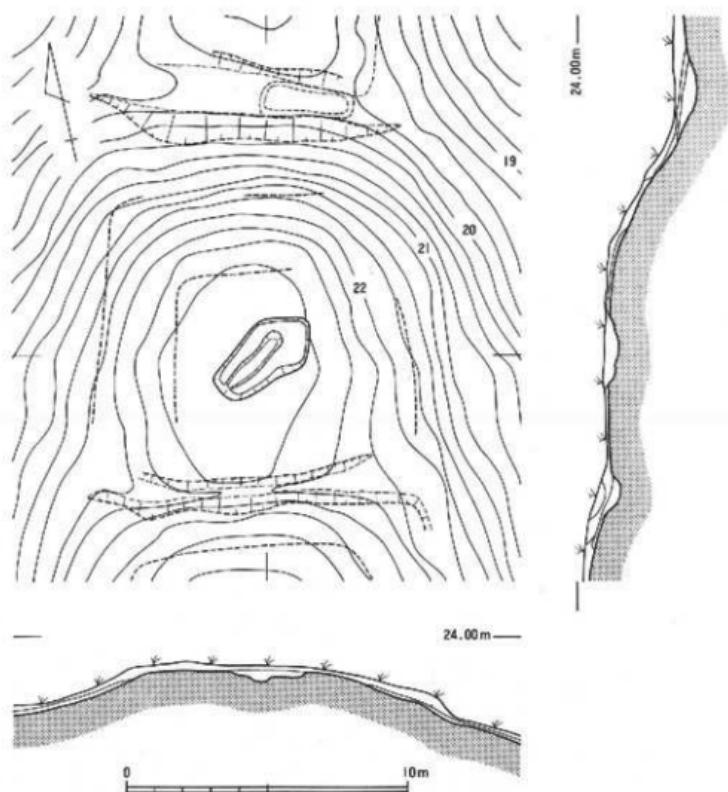


第7図 2号墳出土遺物実測図

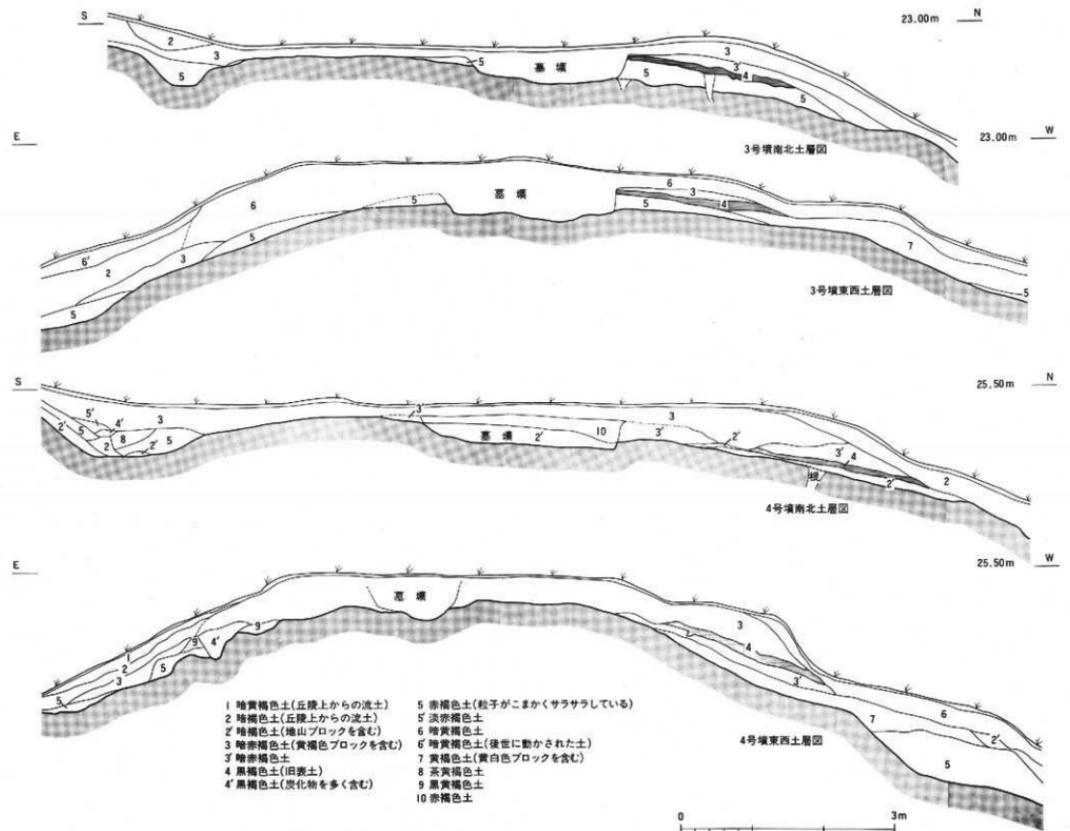
2本のタガをもち中段に円形透しが2孔あけられている。口径23.9cm×25.3cm、底径19.1cm×15.2cmのだ円形を呈し、それぞれの長径の方向は直交している(図版7-2)。タガの断面は台形を呈し、タガの上下及び口縁部はヨコナデがなされている。外面の調整をみると上段はタテハケのあと部分的に指でナデ、中段はタテハケのあとB種あるいはC種ヨコハケ、下段はタテハケのあと底部付近外表面をわずかに削っている。内面は口縁部付近はナナメハケ、底部付近はヨコハケのあとナナメハケ、その間はタテハケのあとナデ調整が行なわれている。焼成は良好で黄褐色を呈し、黒斑はみられない。

## 2. 3号墳

**墳丘** 本墳は、2号墳北側の標高22mあまりのところに位置している。A地区のなか



第8図 3号墳墳丘実測図



第9図 3・4号墳丘土層図

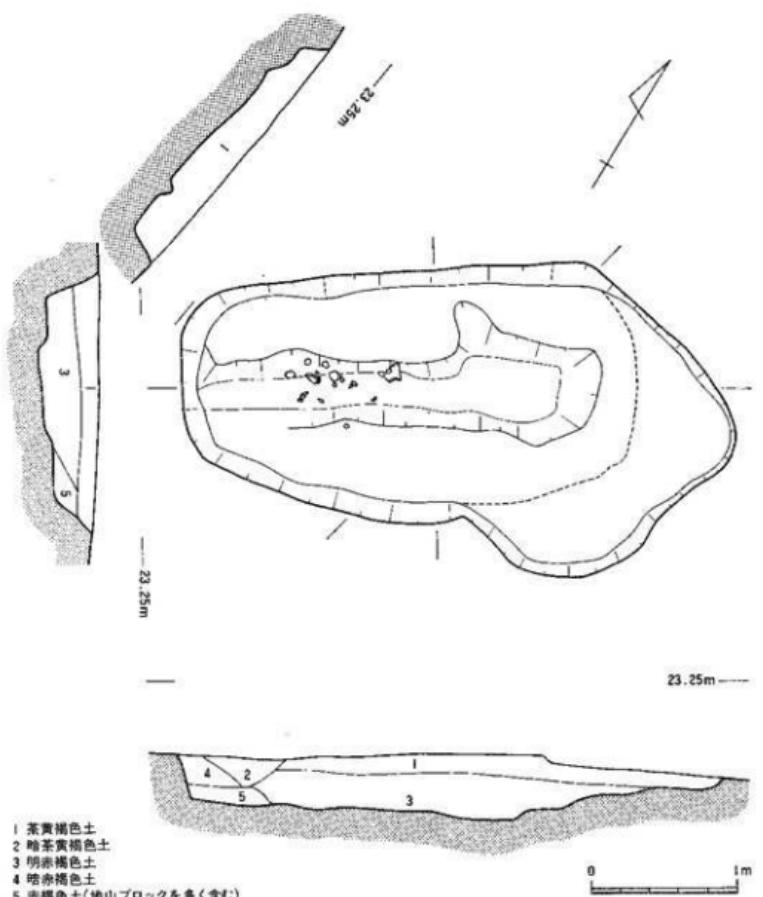
ではかなりの急斜面の尾根上に立地している。発掘前の現状では墳頂部が削平されていたが、外見的観察によつても明らかに古墳であることが識別できるほどの一定の形態は留めていた。発掘前の地形測量によれば見かけの上では南北約12m、東西約15m、北側墳裾からの高さ2.2m、南側墳裾からの高さ0.3mの方墳と考えられた（第3図）。

調査の結果、南側で尾根筋に直交して東西方向に穿たれた溝状遺構が検出され、北・東・西側では地山を整形した痕跡が認められた。溝状遺構はほぼ直線的に掘り込まれ、比較的しっかりと方形台状に造成されその上に盛土が施されていた（第8図）。

墳丘規模は南北11m、東西11mで、高さは北側裾からは約1.6m、南側の溝底からは約0.8mを測る。墳頂部には東西幅約6mの平坦面が長さ7mにわたって観察された。墳丘東西方向及び南北方向の土層（第9図）をみると、墳丘中央部より北側と東側には旧表土と推定される黒褐色土層が認められ、その上に30~40cmの厚さで黄褐色地山ブロックを含んだ暗赤褐色土（盛土）層が観察された。さらに北・東・西側の墳裾から丘陵斜面にかけては暗黃褐色土層、暗褐色上層など墳丘部からの流土と考えられる土層がみとめられた。こうしたことから本墳の築成にあたっては墳丘の北半（丘陵先端側）は斜面を「コ」の字形に整形し、南半（丘陵基部側）は東西方向に溝を穿つことによって墓域を画し、その間に生じた土を封土として墳頂部に盛り上げたものと考えられる。墳頂部では現表上下約12cmで埋葬施設を検出したが、地山整形の角度や先の盛土の状況からすると少なくとも現表上よりさらに30~40cmの盛土が施されていたものと推定される。

溝の規模は長さ12m、上端幅1.2m、下端幅0.3m、深さ0.45mで断面は「U」形を呈している。

**埋葬施設** 墳丘のやや北東寄りで2基検出している（第10図）。第1主体部は、長軸をN~48°-Eに向て穿たれた素掘りの土壙である。土壤の平面形は楕円としたものではなく隅丸長方形を呈しており、北東隅は第2主体によって切られていた。検出した規模は長さ3.1m、北東幅1.6m、南西幅1.2m、深さ0.4mで、墓壙底は2号墳と同様に浅く「U」字形に掘りくぼめられていた。墓壙底の「U」字形にくぼんだ規模は長さ2.75m、幅0.45m、深さ0.25mである。土壤内からは土師器表片が出土した。土師器表片は小片で壙内上面のほぼ中央寄りの位置で出土しており、完形に復しえるものではないが1個体であった。故意に破碎されたものか後世の削平によるものなのか現状では判断できなかったが、出土状態などからみて、第1主体部に伴うものと判断された。ただし、壙底より0.45mあまり浮いた墓壙上面から出土していることから、棺内に副葬されたものではなく、棺上あるいは墓壙上に置かれたものと思われた。墓壙北東側小口の方がわずかに幅広くつくられているこ

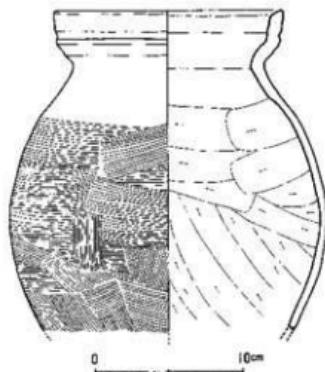


第10図 3号墳主体部実測図

となどから頭位は北東方向を向いていたものと推定される。

第2主体部は、第1主体部の北東隅に重複して長軸を N·10°·Eに向けて穿たれていた。土壙の平面形は隅丸長方形である。検出した規模は長さ2.0m、北東幅1.1m、南西幅0.85m、深さ0.24mの素掘りのものである。遺物は出土していない。重複関係にあることから第1主体部より後に掘り込まれていることが確認された。

**遺物** 第1主体部墓壙上面で土師器甕1個体が出土したほか、墳丘東側斜面から須恵



第11図 3号墳出土土器実測図

器片（第7図1）が出上している。第1主体上面から出土した土師器壺（第11図）は、頸部が「く」の字形で口縁部が上方に伸びる複合口縁の退化したものである。口径15.2cmで器壁は全体に厚手で肩はあまり張らず、やや長胴形を呈している。口唇部は特に厚くその断面は鈍いのみ形である。口縁部から肩部にかけては内外面ともヨコナテ調整がなされている。胴部外面は上半が横方向、下半が斜めあるいは縱方向の粗いハケ目調整がなされている。胎土中には長石、石英等大小の砂粒を含む。焼成は良好できわめて堅緻である。色調は明茶褐色を呈す。

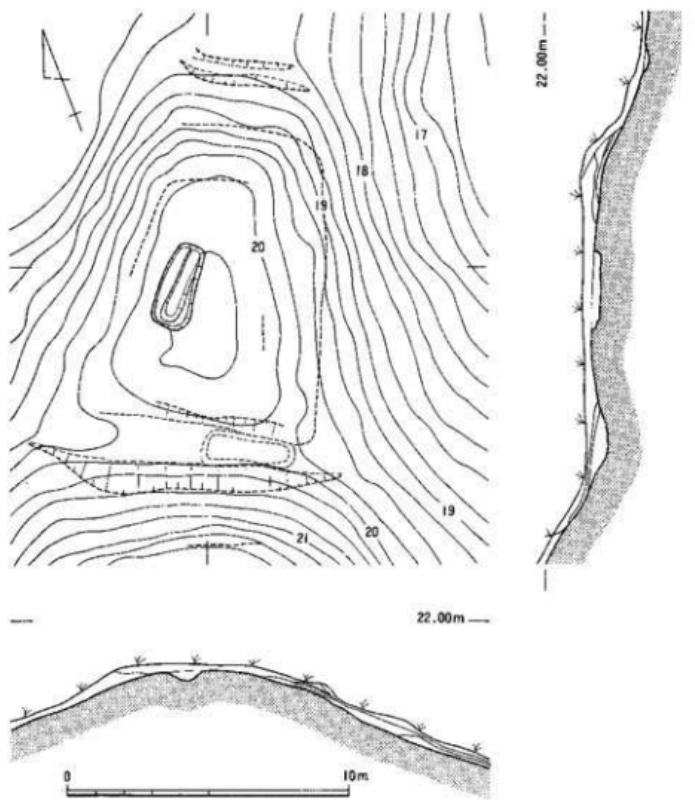
### 3. 4号墳

**墳丘** 本墳は、3号墳北側の標高20mあまりに位置している。尾根幅がしだいに狭くなっている、3、4号墳にかけて急斜面をなす丘陵がここからなだらかになってA-5地点に続くちょうど傾斜変換点あたりに築かれている。発掘前の現状では墳頂部が削平されていたが、外見的観察によると3号墳と同じように明らかに古墳状の高まりを呈していた。発掘前の地形測量では、南北約13m、東西約12m、北側裾からの高さ1.5m、南側裾からの高さ0.3mの方墳と考えられた（第3図）。

調査の結果、南側で尾根筋に直交して東西方向に穿たれた溝状遺構が検出され、北・東側では地山を整形した痕跡が認められた。溝状遺構は直線に掘り込まれ、北・東側の地山整形も直線的になされている。このことから、西側はやや流れ崩れていたものの方形台状に造成されたものと考えられた（第12図）。

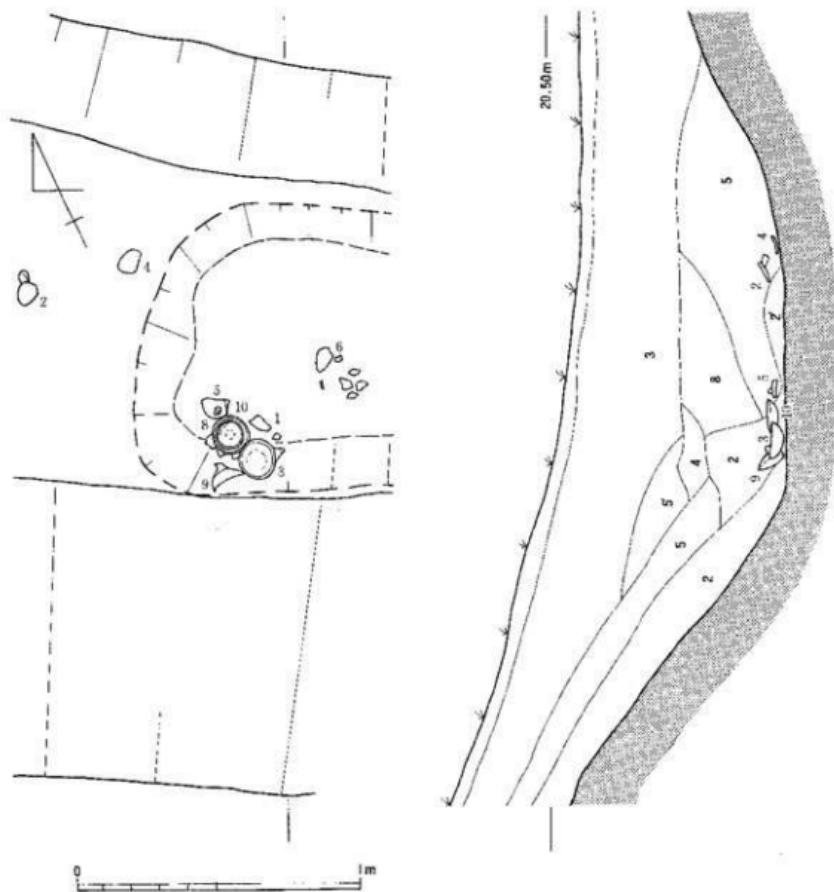
墳丘規模は南北13m、東西8.5mで、高さは北側裾からは約1.5m、南側の溝底からは約0.8mを測る。墳頂部には東西約4.5mの平坦面が長さ8.5mにわたって観察された。墳丘東西方向及び南北方向の土層（第9図）は、3号墳と同様に、墳丘中央部より北側と東側に旧表土と考えられる黒褐色土層が観察され、その上に暗赤褐色土層、黄褐色地山ブロックを含む暗赤褐色土層などの盛土が確かめられた。また北・東・西側墳裾から丘陵斜面にかけては墳丘部からの流失と思われる暗黄褐色土、暗褐色土が堆積していた。したがって3号墳と同じように丘陵斜面上に立地していることから、3号墳と同様な築成方法をとったものと考えられる。

溝の規模は長さ11m、上端幅2.55m、下端幅1.4m、深さ0.56mで断面は「U」形を呈し



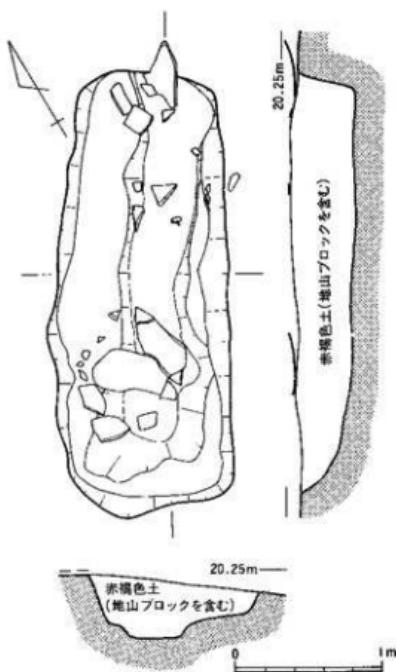
第12図 4号墳墳丘実測図

ている。溝底東半分で土壤らしき浅い落ち込みを検出した。規模は長さ3.2m、幅1.2m深さ0.15mであるが、土層観察用畦がずれていたため墓壙になるかどうかといった性格については明確に判断できなかった。この浅い落ち込みの南西隅から須恵器蓋環身、土師器高环、低脚付环、环が出土した(第13図)。これらはほぼ1ヶ所にまとまって地山直上で出土した。土師器高环、低脚付环、环の出土状態は横転していたり破片の状態でいずれも正位ではなかったが、本来は正立していたものと思われる。うち高环2個体は完形に復元し得るものであった。須恵器蓋環身は内面を上に向けた状態で出土しており、ほぼ原位置を保っていると思われる。その他、墳丘東、西側斜面の表土直下で、後述する主体部内出土のものと同一個体になる須恵器襄片が多数出土した。



第13図 4号墳溝内土器出土状況(土層の番号は第9図、遺物の番号は第15図に同じ)

**埋葬施設** 墓丘のやや西寄りに位置しており、長軸をN-31°-Eに向けて1基穿たれている(第14図)。土壤の平面形は整然としたものではないが、大略隅丸長方形を呈している。検出した規模は長さ3m、北東幅0.95m、南西幅1.3m、深さ0.38mの素掘りのもので、盛土中から掘り込まれていた。墓壙底は2、3号墳の主体部と同様に浅く「U」字形に掘りくぼめられていた。墓壙底の「U」字形にくほんだ規模は長さ2.6m、幅0.6m、深さ0.2mである。壙内からは須恵器襲片が出土した。須恵器襲片は胴部下半が墓壙底よりかなり浮いた位置で出土しており、その出土状況からして3号墳第1主体部と同様に棺上あるいは



第14図 4号墳主体部実測図

は良好で、色調は赤褐色を呈している。外面には黒斑がみられる。

2の土師器低脚付环は「ハ」の字形にふんばる脚が付き、体部は丸くなるが口縁部は欠失している。底径は9.2cmである。环部は風化が著しく調整は不明瞭であるがヨコナデ調整と思われる。脚部はヨコナデ調整されている。胎土中に石英、長石等の砂粒を多く含む。焼成は良好で暗黄褐色を呈する。

3～9は上師器高环である。环部の形態からすると、ロート状にやや直線的に開くもの(6)と大きく内湾するもの(3・4・7・9)とがある。

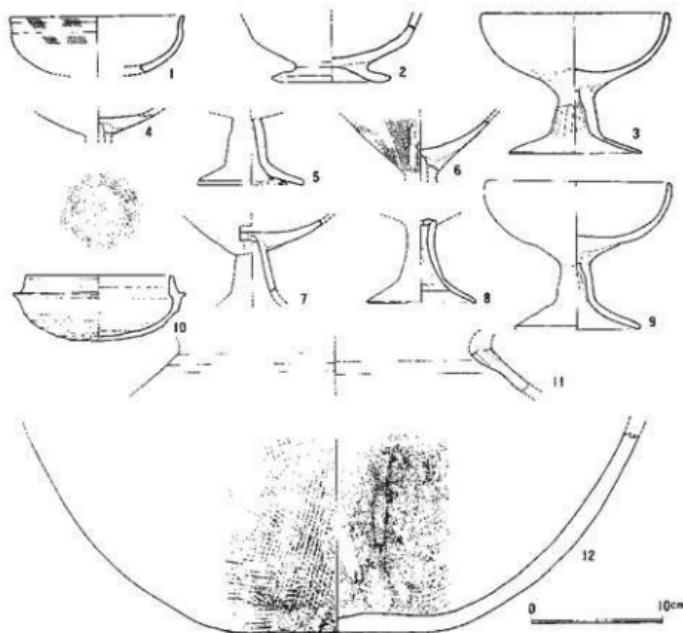
6は脚部と环部口縁を欠いているが、环部底面に柄状の凹みを設け、そこに円筒状の脚部を差し込んだのち、环部と脚部の接合面に粘土を貼り付けて補強している様子がよくわかる(図版13)。内面の調整は不明であるが、外面の接合面にはハケ目調整が施されている。焼成は良好で赤褐色を呈する。

3はほぼ完形品で、口径14cm、器高11.6cmを測る。环部と脚部の接合法は6とはほぼ同様であるが、环部下半には指による押圧痕がみられる。环部は内外面ともヨコナデ調整を行な

墓壙上にすえ置かれたものと考えられた。なお、須恵器壺上半部は後世の削平によって埴丘の東、西側斜面に散布していた。

**遺物** 主体部上面から出土した須恵器壺、溝内の浅い落ち込みから出土した須恵器蓋环身、土師器高环、低脚付环、环などがある(第15図)。

第15図1の土師器环は底部、体部は丸く口縁部近くでわずかにくびれて口縁部はやや外反する。復元口径は13.2cmである。外面はハケ目調整の後ヨコナデで調整、内面はヨコナデで調整されている。胎土中に大粒の砂粒を若干含むが、ほとんどの砂粒は極小あまり目立たない。焼成



第15図 4号墳出土土器実測図

っている。脚部のうち筒状部外面は縦方向のヘラ磨きがなされ、内面はナデ調整が行なわれているが、しばり目がわずかに残っている。胎土は緻密、焼成は良好で黄褐色を呈する。

9は形態、大きさともに3にきわめて近い完形品で、口径13.7cm、器高11.4cmを測る。調整・技法ともに3とほとんど同様な手法を用いている。胎土は緻密、焼成は良好で黄褐色を呈する。

ほかに土師器高环の環部および脚部の破片が4個あるが、これらはいずれも、3・9などに類似した形態、調整、技法をもつものである(4・5・7・8)。なお5の裾部内面はハケ目が残っている。

10の須恵器蓋环身は体部から底部にかけて丸味を帯び、たちあがりは急だがわずかに内傾し、端部は丸くなっている。口径11.2cm、器高5cmの小型品である。体部外面は底部から器高の2分の1くらいに及ぶ範囲にわたって回転ヘラ削りが施され、他は回転ナデで調整されている。ヘラ削りの観察によればロクロは時計回りの方向に回転しているものと考えられる。底部内面はわずかに同心円状痕が残っている。胎土は緻密で石英等の小砂粒を

含む。焼成はやや不良で、色調は外面灰白色、内面明黄灰色を呈している。

11、12は胎土、焼成から同一個体と思われる甕片である。11は頸部復元径24cmで、内外面とも回転ナデで調整されている。頸部断面には口縁部との接着をよくするための叩き目がわずかに残っている。12は丸底の甕の底部である。内面は同心円状痕をすり消してはいるが、ていねいなものではなく同心円状の痕跡を多く留めている。外面は平行叩き目である。焼成はやや悪く、色調は青灰色を呈する。

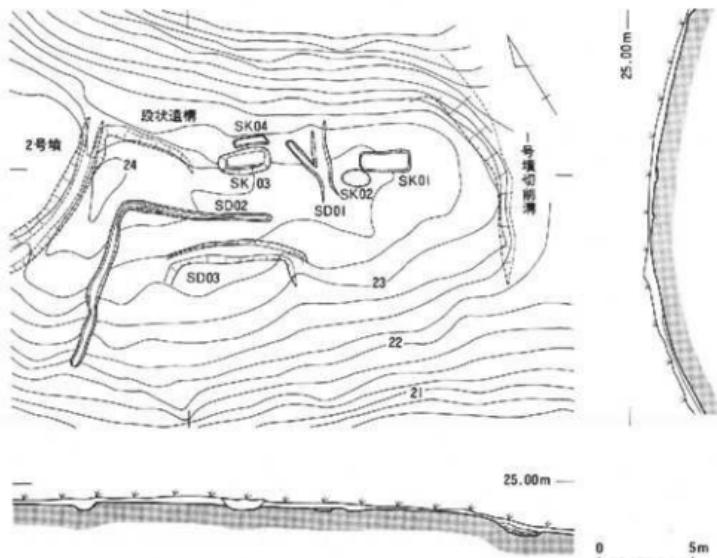
以上遺物の特徴などから本墳出土の須恵器は山本清氏の須恵器編年第Ⅰ期に含まれよう。

#### 4. A-8地点

この地点は、1号墳と2号墳との間に位置している。1号墳から2号墳にかけて平坦な丘陵が続いており、標高24mあまりでA地区のなかでは比較的広い場所を占めている（第3図）。

調査の結果、この地点では土壤4個、溝状造構3条、地山加工段1が検出された。これらの遺構について1号墳側から順次説明を加えることとする（第16図）。

**SK01** 1号墳切削溝の北西約4.2mに位置している。長軸をN-29°-Wに向けた素掘りの土壤で、ほぼ垂直に入念に掘り込まれている。土壤の平面形は整然とした長方形である。



第16図 A-8地点遺構配置図

検出した規模は長さ2.6m、南東側幅1.1m、北西側幅0.85mで、深さ0.42mである。土壌内の土層は分層することができなかったが、茶褐色土層がみられ、両小口付近には拳大の地山ブロックがみとめられた。遺物は出土していない(図版15-1・2)。

**S K02** S K01の北西隅に重複して穿たれた平面だ円形の土壙である。検出した規模は長径1.5m、短径0.9m、深さ0.2mである。すり鉢状を呈し、壙内は凹凸が著しい。壙内中央部には径0.54m、深さ0.12mの小孔があった。遺物は出土していない。

**S D01** S K01の北西側約1.3mに位置している。規模は長さ4.4m、幅0.9m、深さ0.25mである。S K01を区画するかのように尾根筋に直交して掘り込まれている。遺物は出土していない。

**S K03** S D01の北西側約2.2mに位置している。長軸をN-22°-Wに向けて2段に掘り込まれた長方形を呈する土壙である。検出した規模は上縁で長さ2.8m、南東側幅1.2m、北西側幅0.85mを測り、2段目までの深さは0.4mある。2段目は長さ2.1m、南東側幅0.7m、北西側幅0.52m、深さ0.2mを測る。壙内の土層はS K01と同様に分層することができなかったが、両小口部に拳大の地山ブロックのみとめられたことが注意される。遺物は出土していない(図版15-3・4)。

**S K04** S K03の北側に隣接して穿たれた小型の素掘りの土壙である。平面長方形で検出した規模は長さ1.8m、南東側幅0.4m、北西側幅0.37m、深さ0.12mである。遺物は出土していない。壙内にはS K03に類似した赤褐色土層がみとめられた(図版15-3・4)。

**S D02** S K03の南側約2.1mに位置している。幅0.2~0.3m、深さ0.1~0.2mの溝状遺構で、全長約17mにわたって「L」字形にめぐっている。遺物は出土していない。

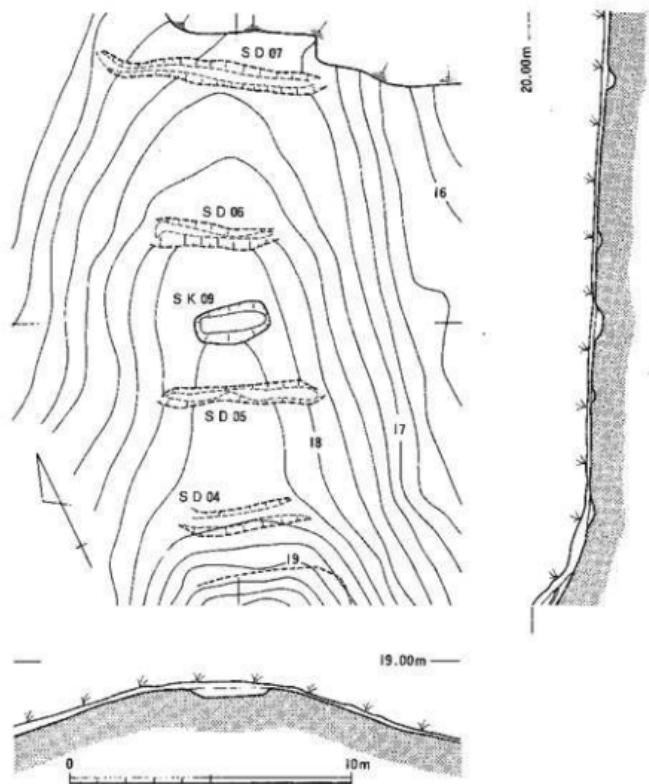
**S D03** S D02の南側約1mに位置している。検出した規模は長さ8.4m、幅1.15m、深さ0.2mで「コ」の字形にめぐっている。溝内から土師器片が出土している。土師器片は小片で器種・時期は不明である。この溝は形状から墓域を区画したもののように思われたので南側を精査したが斜面となっているため埋葬施設等は検出することができなかった。

**段状遺構** S D02の東側約3mで検出された地山加工段である。高さは約0.45mで南北方向に長さ5.2mにわたってみとめられた。この段状遺構に沿って円筒埴輪片が出土している。さらに段状遺構南端から西方にかけても円筒埴輪片がみとめられた。段状遺構上部の平坦面は表土直下で地山になっており、埋葬施設といったものは確認されなかったが、周辺から円筒埴輪片が少なくとも3個体以上「L」字形に散布していたことから、もともとある程度の盛土をもった古墳であった可能性もある。仮りに古墳とすれば南側の円筒埴輪出土位置から北側の2号墳周溝まで約5mとなり、きわめて小規模なものといえる。

以上A-8地点で検出された遺構の概略を述べてきたが、遺物がほとんど出土していないためその構築年代等については明確にできなかった。しかしながら、土壌は掘り形の形状、規模などから墓壙の可能性が強いものと判断され、SD01は位置関係などからSK01あるいはSK03・SK04を区画するために設けられた可能性が強いものと判断された。

### 5. A-5地点

この地点は、4号墳の北側で丘陵先端部にあたり、丘陵部調査区のなかでは最も低い所に位置している。標高18mあまりで、2号墳から北へほぼ直線的に急傾斜をとりながら伸びてきた丘陵がやや平坦になったあたりに築かれている。丘陵先端部は後世の採土により崖となっている。発掘前の現状では丘陵頂部が人工的とも思われる平坦面となっており、A



第17図 A-5地点遺構配置図

-8地点と同じように土壌墓群の存在が予想された（第3図）。

調査の結果、長軸を南東から北西方に向て穿たれた土壌1基と尾根筋に直交して4～5mの間隔で掘り込まれた溝状遺構4条が確認された（第17図）。以下4号墳の位置する側から北側に向けて各遺構の概要を順次説明することにする。

**S D04** 4号墳の北側約1mに位置している。尾根筋に直交して東西方向に掘り込まれている。溝の規模は長さ5m、幅0.9m、深さ0.35mで断面は「U」形を呈している。SD05との間に埋葬施設の存在が予想されたが、発掘調査の結果遺構は検出されなかった。溝内には暗褐色土層がみとめられ、遺物は出土していない。

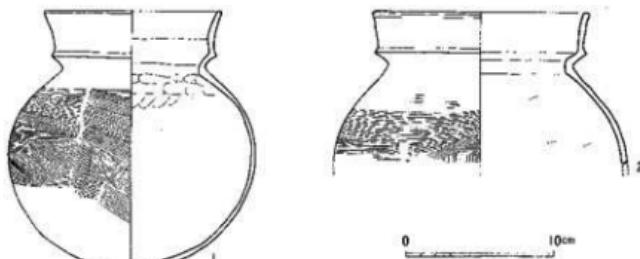
**S D05** SD04の北側約4mに位置している。SK09を区画するかのように尾根筋に直交して東西方向に掘り込まれている。溝の規模は長さ6m、幅0.55m、深さ0.22mである。溝内には茶褐色土層がみとめられ、遺物は出土していない。

**S K09** SD05とSD06の中間に位置している。長軸をN 18° Eに向けて穿たれた素掘りの土壌で平面形は隅丸長方形を呈する。検出した規模は長さ2.6m、幅1.38m、深さ0.52mである。壙内には黄褐色土層がみとめられ、遺物は出土していない。

**S D06** SD09の北側約1.8mに位置している。尾根筋に直交して東西方向に掘り込まれている。溝の規模は長さ4.5m、幅0.8m、深さ0.4mである。溝内には茶褐色土層がみとめられ、遺物は出土していない。

**S D07** SD06の北側約5mに位置している。尾根筋に直交して東西方向に穿たれており、わずかに弧状を呈している。溝の規模は長さ8m、上端幅0.85m、下端幅0.35m、深さ0.64mで、断面は「U」形を呈しており、入念に掘り込まれている。この溝はその位置や形状から墓域を区画したものとも思われるが、後世の採土によって北側が崖となっているため、調査を実施することは不可能であった。溝の東側溝底より土師器壺が2個出土した。うち最も東寄りのものは横転していたが、完形に復元し得るものであった。

SD07内から出土した遺物のうち完形の壺形土器（第18図1）は口径11.9cm、高さ17.3cm、胴部最大径16.5cmの小型のものである。頸部はゆるやかな「く」の字形になり、口縁部は上方にわずかに広がってのびる複合口縁で口唇部はやや角張っている。胴部はほぼ球形で、底部は丸底になっている。風化が著しく不明瞭な点もあるが口縁部から頸部にかけては内外面ともヨコナデ調整、胴部外面はこまかに横あるいは斜め方向のハケ目調整を施し、胴部下半から底部にかけてはハケ目調整のあとナデ調整が行なわれている。内面頸部以下はヘラ削り調整が行なわれており、器壁は薄く仕上げられている。胎土はあまり砂粒を含まず緻密で、色調は黄褐色ないし暗褐色を呈し、焼成は良好である。



第18図 A-5地点 SD07出土土器実測図

2は胴部下半を欠失しているが、口径14.8cmの壺形上器で、1とほぼ同様な形態をもつ。口縁部から頸部にかけては内外面ともヨコナナド調整、調部外面は横あるいは斜め方向のハケ目調査がなされ、内面頸部以下はヘラ削り調査が顕著である。胎土中に石英、長石などの砂粒を多く含む。焼成は良好で色調は赤茶褐色を呈する。

#### IV まとめ

以上、寺床遺跡A地区の遺構の概要を述べてきたが、ここでは調査によって得られた知見のうち2・3の問題点と今後の課題について若干の私見を述べ結びとしたい。

この度の調査対象となったA地区（1号墳を除く）では、方墳3、土壙5、溝状遺構7、段状遺構1などが検出された。

このうちA-8地点では土壙4、溝状遺構3、段状遺構1が確認されたが、遺物が少量しか出土していないので、現状では年代を知る手掛りはほとんどないといってよい。SD03の近辺では埋葬施設は確認されなかったが、溝内から土師器小片（時期不明）が出土したほか、溝の形状などからSD03は墓域を区画するために掘り込まれたものと思われる。段状遺構としたものは、円筒埴輪片の散布状態などから古墳であった可能性も考慮されるが、今後の検討課題としたい。SK01・03・04は遺物が全く出土していないが、規模、形状、掘り込み方などからすると墓壙であった可能性が強いものと思われ、それらの中間に位置するSD01は墓域を区画するための溝であったとも考えられる。なお、SD02・SK02については全く性格が不明である。

A-5地点では溝状遺構4と土壙1が検出された。溝状遺構は丘陵尾根筋に直交しているがも4~5mの間隔をおいて掘り込まれており、このうちSD05とSD06の中間で土壙が1個確認された。遺物はほとんど出土していないがSD07内から土師器蓋が2個体分出土している。この土器の特徴は神原神社古墳出土のものに類似していることから、これま

での県内での土器編年でいうところの小谷式の範疇に入るものと考えられ、寺床1号墳の築造時にかなり近いものであることが注意される。A-5地点ではこのほかの遺構からは全く遺物が出土していないが、ほぼ等間隔でかつ相似した形状に掘り込まれていることから、いずれもSD07と大きく隔たる時期のものではないと考えられる。このようなA-5地点のあり方にきわめて類似した例として邑智郡石見町の中山古墳群<sup>(1)</sup>で検出された遺構がある。中山古墳群では尾根筋に直交してほぼ10mの間隔で5条の溝が掘られ、その区画内で1~3基の土壙墓、箱形石棺墓が確認されている。本遺跡では土壙が1基しか確認されていないが、中山例などから推測すれば、これらの溝は墓域を区画したものである可能性が高く、検出された土壙は上壙墓とみてよいのではないかと思われる。

次に、2・3・4号墳について触ることにしたい。これらはいずれも一辺10数m、高さ0.8~1.6mあまりの小規模な方墳であった。立地としては丘陵尾根筋の傾斜地に3基とも近接しながら階段状に営まれている。墳丘の築成にあたっては、墳丘の北半は斜面を「コ」の字形に整形し、南半は東西方向に溝を穿つことによって墓域を画して墳丘基底部をつくり出し、その際に生じた土を封土として墳頂部に盛り上げたものと考えられる。内部構造についてみると、いずれも木棺を直葬したと考えられる土壙が確認された。墓壙は長さ3m、幅1~1.5mあまりの不整隅丸長方形を呈し、2・3・4号墳ともきわめて相似したものである。また、A-8地点で検出したSK01・03・04は墓壙壁がほぼ垂直に掘り込まれ、底面は水平につくられているのに対し、2・3・4号墳の主体部は墓壙壁が比較的ゆるやかな角度で掘り込まれ、墓壙底はいずれも浅く「U」字形にくぼめられており、通常の箱形の木棺を直葬したものとは考え難いものであった。墓壙底部の形状などからすると舟底形か舟底形を呈する棺が用いられたものと推測される。

遺物としては多少の差はあるがどの古墳からもなにかしかのものが出土しているので、それをもとに古墳の築造時期について考えてみたい。

まず2号墳では主体内部から鉄剣1口が出土したのをはじめ、溝内から円筒埴輪、須恵器器台片が出土している。須恵器器台片は同一個体と考えられる破片がこの丘陵上のかなり広範な地域に点在しているので、2号墳の築造時期を考える上では一応対象外としておきたい。また、鉄剣も年代決定にはあまり有効ではないと思われる所以、円筒埴輪の特徴からこの古墳の築造時期をみていくことにする。県内における埴輪の編年作業はほとんど進んでいないが、川西氏の編年<sup>(2)</sup>に従えば外面に2次調整としてB種あるいはC種の横方向のハケ目調整を行なっていること、底部調整がみられないこと、黒斑がないことなどからⅣ期あるいはⅤ期のなかでも占い方に含まれるものと思われる。したがって2号墳の築造時

期は中期後半から末にかけてのものと考えられる。

3号墳では第1主体部上面から出土した土師器甕がある。口縁部は複合口縁ではあるがかなり便化した形態のもので、胴部はやや長胴形を呈し、器壁は厚く全体に粗いつくりである。こうした特徴は大東式土器に近いがさらに退化した特徴ともみられ、漠然とではあるが県内で須恵器が出現するのと相前後した時期、すなわち中期後半ごろに位置付けることができよう。

4号墳では主体部上面から須恵器甕、溝内から土師器、須恵器等が出土している。主体部上面から出土した須恵器甕は破片ではあるが、底部内面の同心円状痕をすり消している点など比較的古い手法がみとめられる。溝内から出土した土師器、須恵器は溝底直上に比較的まとまった状態で出土していることから3号墳に伴うものとみてよいと思われる。このうち完形品である須恵器甕壺身は山陰の須恵器編年<sup>15</sup>で第Ⅰ期の特徴をそなえたものということができよう。したがって、4号墳もやはり中期後半ごろのものと考えられる。

以上のように2・3・4号墳はいずれも墳形、規模、築成法、内部構造等ほぼ同様なもので、出土遺物からみた年代観からすれば比較的短期間のうちに相次いで築造されたものと考えられる。各古墳の築造順序については年代決定の根拠とした遺物の種類がそれぞれに異っているので即座に比較できない。立地条件からすれば丘陵頂部に近い2号墳から丘陵先端に向かって3号墳・4号墳と築造されたとも考えられるが、それらの順序については今後の課題としたい。また、1号墳を含めて考えてみた場合、寺床丘陵ではまず古墳時代前期に当地方としては第1級に近い大形方墳（1号墳）が築かれ、その後やや時期を離れて、2・3・4号墳が中期後半ごろに相次いで築かれているといえる。最近の調査例では仲仙寺古墳群、長砂古墳群、増福寺古墳群、観音寺古墳群など1つの丘陵上に比較的古い段階のものがあり中期後半ごろにかなり短期間のうちに多くの古墳がつくられたり、中期後半ごろから後期初頭にかけてかなり集中して古墳が築造され、その後同一丘陵上には後期古墳の顯著な例がみられない遺跡がいくつか知られてきている。何故1号墳と2・3・4号墳との間に若干の時間的な隙りがあるのか、1号墳の被葬者と2・3・4号墳の被葬者はいったいどのような関係にあるのかなどといった興味深い問題が多く残されているがこうした点については、周囲の遺跡の在り方とも合せ考えて、今後の多角的検討が要求されよう。

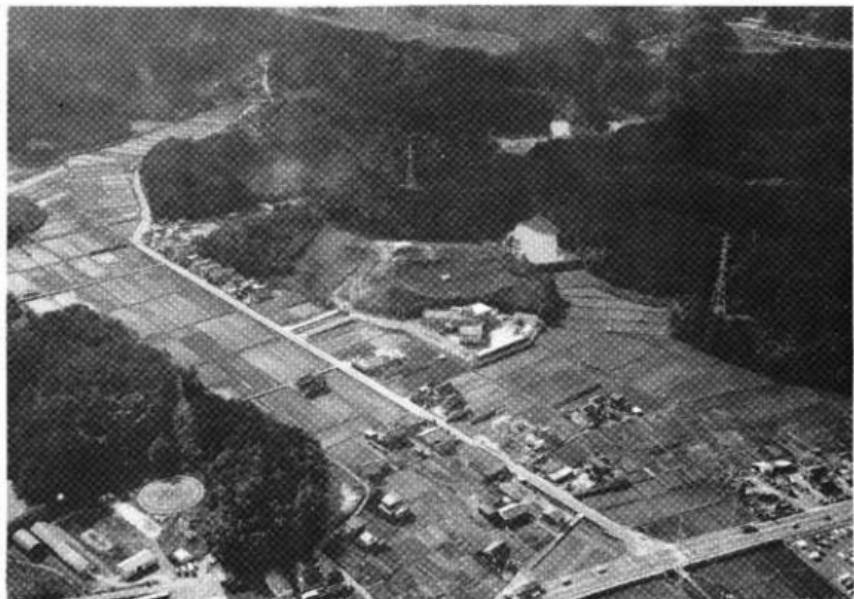
注1. 前島已基ほか「鳥取縣神原神社古墳出土の土器」『考古学通報』第62卷第3号（昭和51年）

2. 注1に同じ。

3. 三宅博士ほか「中山古墳群発掘調査概報」石見町教育委員会（昭和52年）

4. 川西宏幸「丹波道輪轆論」『考古学報誌』第64卷第2号（昭和53年）

5. 山本清「山陰の須恵器」『山陰古墳文化の研究』所収（昭和46年）



I. 遺跡遠景（北東から）



I. A地区(1号墳を除く)調査前の状況（北東から）

図版 2



1. A地区(I号墳を除く)調査前の状況（南西から）



2. A地区(I号墳を除く)調査前の状況（北西から）



1. A地区調査前の状況（東から）



2. A地区調査後の状況  
(東から)



3. 1号墳墳頂部の埋葬  
施設（北西から）

図版 4



1. A地区調査後の状況（北から）



2. A地区調査後の状況（南から）



1. 2号墳調査後の全景（南から）



2. 2号墳主体部土層



3. 2号墳主体部

図版 6



1. 2号墳溝内遺物出土状況



2. 2号墳切削溝（西から）

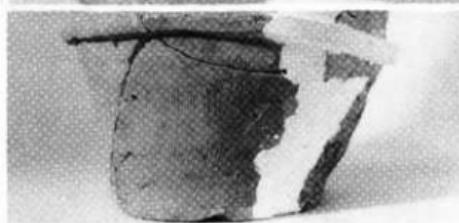


3. 2号墳切削溝土層（西から）

1. 2号墳他出土の須恵器器台



2. 2号墳溝内出土の円筒埴輪



3. 円筒埴輪細部

図版 8



1. 3号墳調査後の状況（南から）



2. 3号墳調査後の状況（北から）



1. 3号墳第1・2主体部

2. 3号墳第1主体部遺物出土状況



3. 3号墳切削溝土層（西から）



4. 3号墳第1主体部出土土器

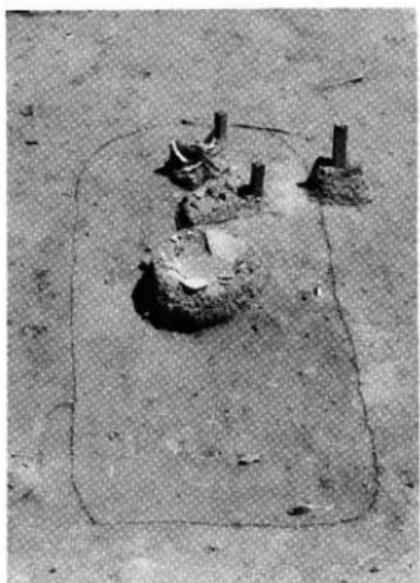
図版10



1. 4号墳調査後の状況（南から）



2. 4号墳調査後の状況（北から）



1. 4号墳主体部遺物出土状況



2. 4号墳主体部



3. 4号墳切削溝土層（東から）

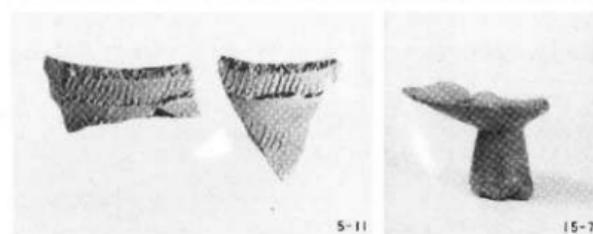
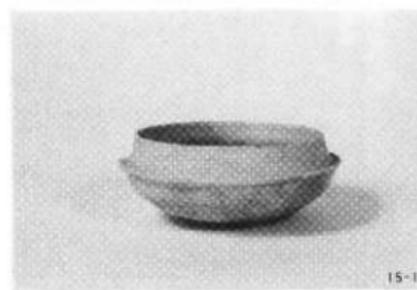
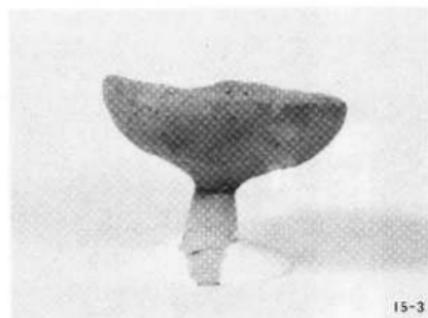
図版12



1. 4号墳溝内遺物出土状況（北から）



2. 4号墳溝内遺物出土状況（東から）



4号墳出土土師器・須恵器



1. A-8 地点調査後の状況（北西から）



2. A-8 地点調査風景（南東から）



1. A-8地点SK01土層（南東から）



2. A-8地点SK01（南西から）



3. A-8地点SK03-04土層（北西から）



4. A-8地点SK03-04（南西から）

図版16



1. A-5 地点調査後の状況（北から）



18-2



18-1

3. A-5 地点 S D 07出土土器



2. A-5 地点 S D 07内遺物出土状況（東から）

昭和57年3月15日 印刷  
昭和57年3月30日 発行

**寺床遺跡発掘調査の概要**  
**-A地区-**

発行 東出雲町教育委員会  
島根県八束郡東出雲町指尾  
印刷 松陽印刷所  
島根県松江市西川津町